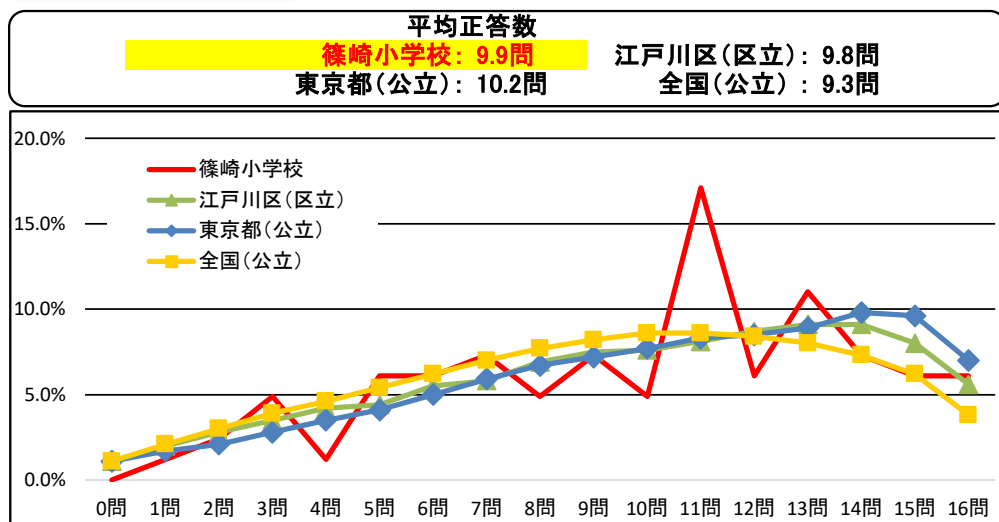


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【算数】江戸川区立篠崎小学校

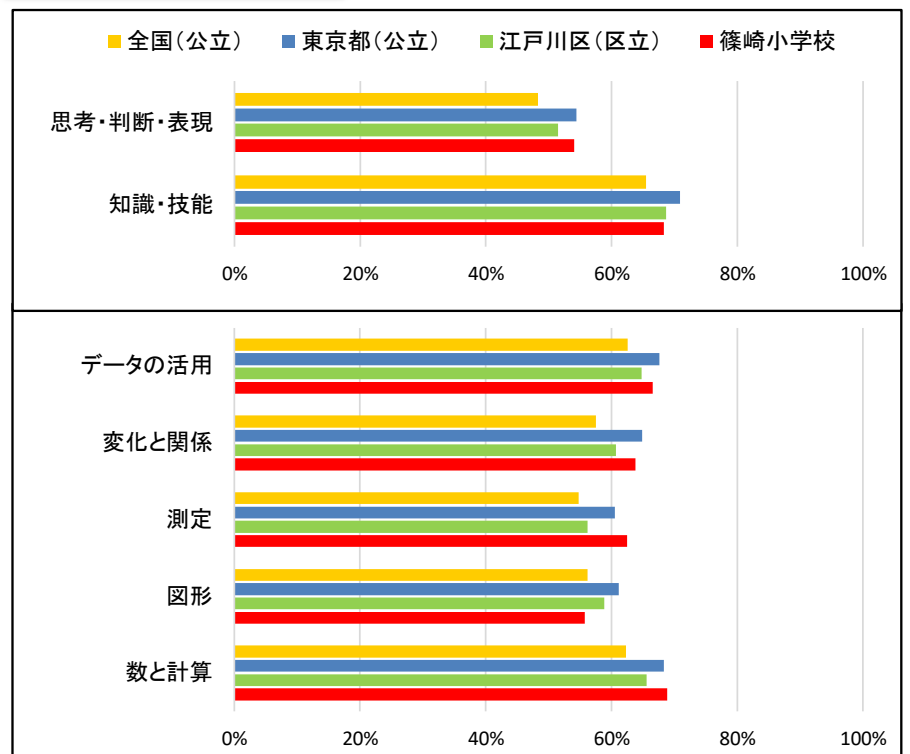
正答数分布



【平均正答率の差】

篠崎小学校	62%
江戸川区(区立)	61%
東京都(公立)	64%
全国(公立)	58%
都との差(ポイント)	-2.0

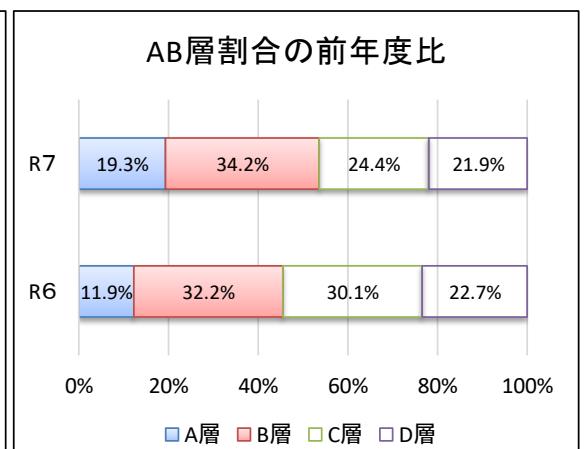
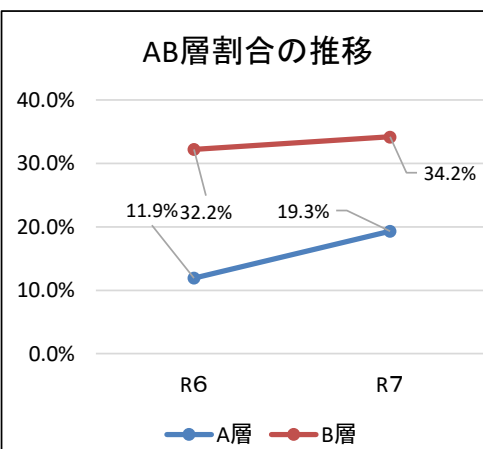
「領域別」の結果



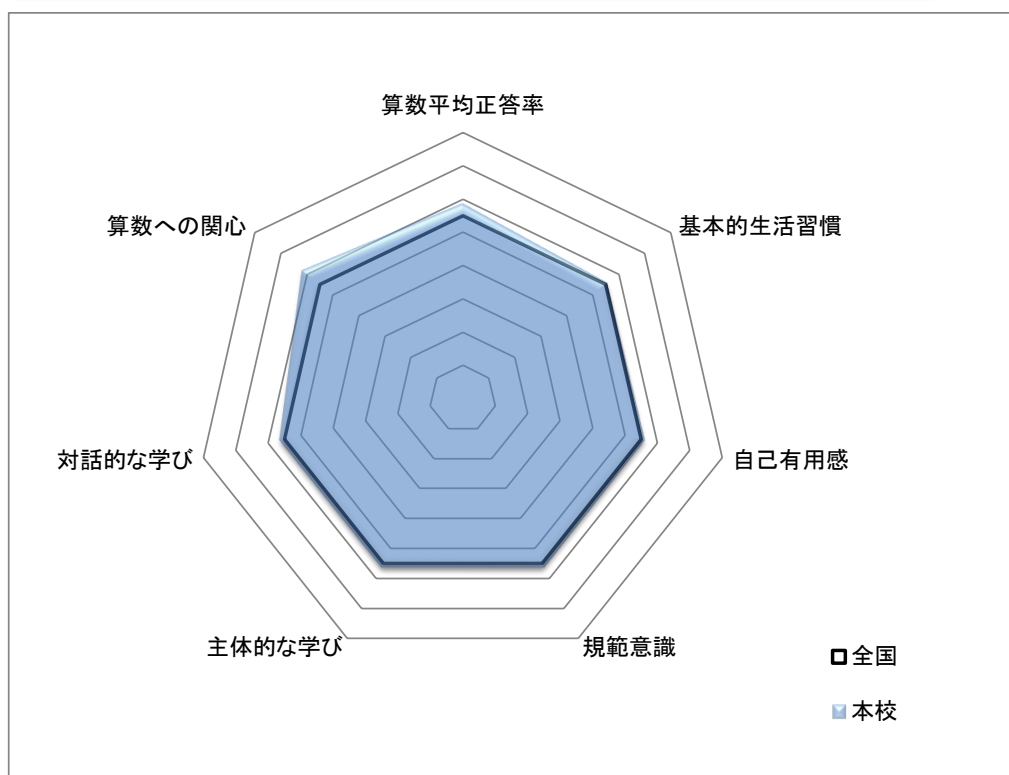
四分位における割合（都全体の四分位による）

算数	上位 ← 下位			
	A層 14～16問	B層 11～13問	C層 7～10問	D層 0～6問
篠崎小学校	19.3%	34.2%	24.4%	21.9%
江戸川区(区立)	22.7%	25.9%	27.9%	23.5%
東京都(公立)	26.4%	25.7%	27.6%	20.3%
全国(公立)	17.3%	25.0%	31.4%	26.3%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《チャートの特徴》

どの領域についても、全国平均を上回っている。「算数への関心」の内容項目である「①算数の勉強が好きであること」、「②授業内容がよくわかる」「③算数の授業で学習したことは将来、社会に出たときに役立つと思う」ということについての割合が高い。それに伴い、算数の正答率も高い。

《家庭・地域への働きかけ》

家庭での学習習慣を付けるために、個人面談や保護者会、学校だよりなどを活用して、家庭学習の大切さを促す。家庭での学習時間を決めることや、毎日継続することにより、学習内容が定着することを説明する。家庭だけに任せるのではなく、学校・児童・保護者の三者で支えていくようにする。

《現状把握》

●AB層の割合と取組内容について
A層19.3%、B層34.2%、AB層が53.5%である。
令和6年度より、AB層の割合が増加した。
特にB層の割合が高い。A層は全国平均より高いものの、東京都・江戸川区平均より低いので、A層の割合を増やすための授業改善を行う。
B層児童は、調査結果を振り返り何ができていないのか児童自ら「課題」を明らかにする。そして、教師はA層、B層それぞれの児童が主体的に学びに取り組めるよう個別最適な環境をつくり、それぞれの「課題」に取り組ませるようにする。

《学校の取組》

・教員の指導力向上

「わかる、できる、学ぶ喜びを感じる児童の育成」を研究テーマに「算数」を中心に校内研究を行っている。各学年、児童にアンケートを取り、実態を踏まえて研究授業を行い、講師から指導を受けて授業改善を行っている。
また、各学力調査を分析し、児童の苦手な点や得意な点を学年で共有し、指導の工夫を研究し実践している。
「江戸川区算数授業スタンダード」を基にした授業や筑波大学附属小教員による授業等、モデルとなる授業を参観し自分の授業に活かすようにしている。

・基礎学力の保障

基礎学力保障のために、低・中学年では四則計算を正確にできるように繰り返し行う時間を設けている。計算技能だけでなく、思考力の育成のために「自分の考えをもつこと」「自分の考えを説明すること」「自分の考えと友達のを比較すること」を授業の中で大切にしている。また、児童がノートを整理して書くことができるように、教師の板書を児童の考えを活かして書くことや、分かりやすく丁寧に書くことを意識している。「EDOスク」を活用し、分からない内容をなくしたり習熟を行ったりする。

・学習習慣の確立

学習習慣とは「自ら学ぶリズムと姿勢を身に付けること」であること、具体的には①時間を決めて取り組むこと ②やるべきことを自分で判断して行うこと ③毎日続けることが大切であることを児童に伝えていく。学校でも、「学習を続けていくことで『わかる』ことや『できる』ことが増えていく」ということを、児童が実感できるような成功体験を積めるようにする。また、ICTを活用して、ドリル学習を積み重ねることで勘違いやケアレスミスがないようにしていく。「江戸っ子 study week!」で学習への意識付けを図る。

・AB層の育成

A層の割合を増やすために、B層の児童のつまづきを明らかにして「できる」ようにする。また、B層児童には結果を振り返り「学習内容の理解不足」が「ケアレスミスや勘違い」かを分析させ、今後の学習への取り組み方を考えさせる。それにより、今後A層への向上を目指す。さらに、学習内容の定着のために、授業の中で既習事項との関連を考えるように促したり、既習を振り返りドリルパークを活用して習熟をしたりする。東京ベーシックドリル診断テストの結果をもとに学校独自で個票を作成し、教員と児童相互で一人一人の課題を把握し、取組に活かしている。